

開催地名：和歌山県田辺市	
開催日時	令和元年 12 月 17 日（火） 13:25 ～ 15:15
開催場所	東部公民館
語り部	安部 あきこ（福島県南相馬市）
参加者	東陽中学校第 3 年学年・職員、東陽中学校区地域住民 約 120 名
開催経緯	近年、大きな地震は起こっていないが、南海トラフ地震に対する備えは重要性を増している一方で、若年層（働き盛りの世代）の危機意識の低下が懸念されている。今回、実際の体験談を聞き、災害が起こったときの行動について、検討の参考にしたい。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>東日本大震災当日、自宅が海に近いこともあり、実際に津波が押し寄せている様子を避難場所から見ていた。原子力発電所から 20 キロメートル圏内だったこともあり、東日本大震災当日は、避難指示を受けて避難していた。状況が落ち着いてからは、回帰支援センターでコミュニティー維持のために交流活動が続けてきた。平成 24 年 12 月からは、より多くの人たちに南相馬市の被災状況を語り継ぎたいという思いから、ボランティアガイドに登録し、市内の被災状況や復興状況を視察に来られた方に対して、自分が見聞きした体験を交えながら案内をしてきた。今日は皆さんに、少しでも震災のことをお伝えしたいと思う。</p> <p>（2）地震発生</p> <p>皆さんはおそらく、8 年前の出来事であり、発生したのはここから離れた東北地方であるため、東日本大震災の記憶はないと思う。すごい地震があったという記憶ぐらいはあるかもしれない。私が住んでいた南相馬市の人たちは、絶対に安全だと言われていた原子力発電所が津波で被害を受け、避難を余儀なくされた。皆が、とにかく避難しなければならなかった。本当に着の身着のまま、大型バスに乗って、バスの目的地がわからないままに移動した人もいた。雪も降り寒い中、山形や群馬、長野、新潟、とにかく引き受けてくれるところに行くしかなかった。10 日くらいで家に戻ってこれると思っていたが、予想に反して避難生活は長引いた。</p> <p>一番悲しかったことは、隣近所の人や、親子、親戚、友達がバラバラになってしまったことである。若い子たちは、ここには住めないと言って遠くにいてしまい、高齢者は地元から離れたがらないので、取りあえず近隣の避難所に身を寄せていた。本当に家族がバラバラになってしまった。</p> <p>避難所生活も、自分の家から何にも持っていくこともできなかったため、体一つで、体育館に避難したので大変であった。プライベートな空間は全くなかつ</p>

た。風邪が蔓延し、私も肺炎になってしまった。とにかく思い出したくもないほど辛い生活だった。

皆が避難して無人となった地元では、空き巣の被害も多く発生した。また、住民が全員避難してしまったため、動物が自由に生活していた。今までイノシシなど見たことがなかったが、どんどん住宅地に現れた。さらには、アライグマやハクビシンも住宅地に侵入してきた。サルもすごく増え、わが物顔に家に入っている状況であった。現在もなお大きな問題となっている。

### (3) さいごに

南相馬市は、津波の犠牲者が 636 名、行方不明者と関連死は、合わせて 500 名近くにのぼっている。震災後、時間が経つに連れて、関連死やうつ病などの病気、自殺が少しずつ増えていった。この事実からも、人とのつながりは非常に大切だと思う。自分一人で生きていくことは難しい。周囲の方々とお互いに支え合って、助け合って生きていけるのが、地域のつながりだと思う。

今、ここにいらっしゃる中学生の皆さんには、明るい未来が待っている。将来の夢もあると思う。自分が住むこの町が、地震や津波の被害を受けるとは考えていなかろう。しかし、災害はいつ降り掛かってくるか分からない。この秋、福島県の本宮市では、大規模な台風による被害を受けた。本宮市の人たちは、絶対にここは大丈夫と言いながら生活していたが、50 年ほど前にも水害を受けていたという。絶対という言葉は信じてはいけないと思う。



開催地より

原発事故からの復興の大変さを本当に教えていただいた。生徒たちも集中して聞いていた。今後は、防災意識を高めて生活していきたい。